

73

江戸時代末の産科の記録： 中島友玄の「回生鉤胞(代)臆」を読む

板野 俊文¹⁾，中島 洋一²⁾

¹⁾香川大学，²⁾中島病院

中島友玄(文化五年(1808)～明治九年(1878))は、中島宗仙(安永三年(1774)～天保十一年(1840))の長男として岡山県邑久郡に生まれた。友玄は天保四年(1833)二十五歳の時に京都に遊学し、吉益(古医法)、緒方(産科)、小石(蘭学)、岡田(産科)、藤林(蘭学)等に入門し、医学を学んだ。この間のことは日記として書かれ、残されている。これに関しては既に報告した(第114回日本医史学会総会学術大会)。今回は、帰郷後の翌年(1834)から明治3年(1870)まで記録した産科の「回生鉤胞(代)臆」を読み、江戸時代末の地方の産科医の仕事を明らかにする。

回生術は賀川玄悦(1700-1777)によって考案された。出産により死に瀕した母体の生命を回生させる術式である。これにより、胎児は無理だが、母体の生命を救うことができるようになった。具体的には「死胎児に対し穿顱術(頭蓋骨に孔をあける手術)・碎頭術(頭蓋骨を打ちくだく手術)截胎術(胎児の体を切り離す手術)をおこなって娩出させ母体の生命を救う手術法」である。

鉤胞術も賀川玄悦によって考案された。産後の治療法の一つで胞衣鉤出と書かれており、切れたりした胞衣を鉤状の道具で取り出す方法である。しかし、その後の弟子達により改良が加えられ、奥劣齋(1780-1835)は雙全術(足位回転術)や鉤を用いず、指で残った胞衣を取り出す断遺胞衣などを開発した。「回生鉤胞秘訣」(日本産科叢書、増田知正、呉秀三、富士川游選集校定、思文閣発行)は劣齋が口授した本であり、友玄が師事した緒方惟勝(1787-1840)は劣齋の弟子になるので、これらの技術を学んだと考えられる。この覚書の題目もこのタイトルによったものと考えられる。

おぼえ(臆)は年、月、場所、患者名または亭主名、父親名、病状、処置、予後等について簡潔に述べられている。回生術を施した場合は二三行が書きくわえられており、ことに困難をきわめた症例に関しては数行かかっている。また朱字で書き加えがある。鉤胞の場合は「胞を下す」又は単に「胞」とのみ書かれている。

だい「代」は本来の行ではなく横に書かれている。つまり元の題は「回生鉤胞 臆」であったが、妻の千代、息子の玄章やその妻の高(多加)が医療に加わったことから、「代」が付け加えられたと考えられる。

件数は243件におよび、多い年で23件(弘化3年)、少ない年で2件(弘化5年)であるが、毎年数件から10数件が書かれている。当時の難産は逆産、横産、坐産、等であり、子癩も数件書かれている。また導尿の実施もあるが、カテーテルで六升の尿をとったという記述もある。通常の順産は産婆が取り上げたか、友玄が取り上げたが、それに関する記述はない。しかし難産のみに関して記載がされていると考えられるが、その割合は不明である。

今回の発表ではこれらの中から、記述の多い部分を取りあげて、解説を行い、当時の産科の状況を知る。

(謝辞) 今回の翻刻に関しては香川大学田中健二先生にお世話になった。記して感謝の意を表す。